

アルネ・ネスの環境哲学

—ディープエコロジーとエコソフィー—

若 林 明 彦

1 環境思想史におけるネスの環境哲学及びディープエコロジーの位置づけ

今日の環境倫理学、環境哲学といった環境問題に取り組む思想が興隆するようになったターニングポイントは、1960年代後半から70年代にかけてである。それは第二次世界大戦後、先進諸国の経済発展に伴う自然環境破壊が目に見える形で現れた時期であり、その反省から自然保護の意識が高まり、環境保護対策も積極的に施され始めた時期であった。実際、1972年にはストックホルムで国連人間環境会議が開かれ、この年に国連環境計画が設置された。また70年代後半には、西欧諸国に「緑の党」が結成され、80年代以降はそれらが各国の環境政策決定に関与するようになる。さらに、生態学 (ecology) の発展によって、環境破壊は地球的規模であることが示されることによって (オゾン層の破壊、地球温暖化など)、環境破壊が人類全体の危機であることが叫ばれはじめ、哲学、倫理、社会学、経済学、政策等のあらゆる側面から環境問題に対する取り組みが本格化し、それらに関する研究論文が量産されることになる。

60年代後半から70年代にかけての環境思想が分岐点であるというのは、人間の利益、幸福を目的とした自然保護の思想、つまり、人間中心主義的 (anthropocentric) 環境思想から人間以外の生物、さらに、自然そのものに人間同様の価値を認める人間非中心主義的環境思想、一語で表すと環境 (保護) 主義 (enviromentalism)⁽¹⁾への転換がそこに見いだせるからである。この環境主義には様々な思想が含まれてい

るが、主に、三つの流れに集約されると考える。トム・リーガンの動物権利論及びピーター・シンガーの動物解放論、ベアード・キャリコットらの全体論的環境倫理、そして、ネスに代表されるのがディープ・エコロジーである。

2 ネスとディープ・エコロジー運動

アルネ・ネスの思想を解明するに当たり、彼の生い立ちを概括するのは意味あることである⁽²⁾。というのも、彼の家庭環境と自然環境は彼の思想に少なからぬ影響を与えたからである。

アルネ・ネスは、1912年、ノルウェーのオスロにて裕福な家庭に生まれ、幼少時代からノルウェーの豊かな自然の中で過ごした。特に彼の山に対する思い入れは強く、生きているものに関わるすべてのものに、石や鉱物にさえ感嘆することを山から学び、山は彼の生後一年足らずで世を去った父の代わりであると言うほどだった。そして彼はヨーロッパにおいて著名な学者になってもなお、象牙の塔に閉じこまることなく、むしろ山の中で思索することを選んだのであった。

-
- (1) 通常、「自然（環境）保護」に対しては conservation という語が使われ、conservationist は「自然（環境）保護論者、運動家」という訳語が対応する。しかし、自然環境保護についての思想、つまり「環境（保護）主義」に対しては conservationism ではなく environmentalism という語が使われる。ここには conservation という言葉（アメリカの初代森林局長ピンショ어가1907年に初めて「自然保護」という意味で使い始めた）が、今日の環境倫理学や環境哲学における「保護」の概念には、もはや対応できないという事情があると考えられる。いったい「保護する」とはどういうことなのかを問うことが環境の今日的状況においては、まずもって重要なのである。つまり、「保護する」とは、自然を人間の健康で快適な生活を支える資源とみなし、それを長期的視野に立って適切に「管理する」ことなのか、それとも自然及びその中に生きているすべての存在者にも人間同様の固有な価値を認めるが故に、人間だけの利益追求から保護することなのか明確に区分される必要があると考えられるようになったのである。そして、conservation という語は前者を指す傾向があるためにそれと区別するために environmentalism という語が用いられるようになった。

したがって、後者の視点は人間ではなく、生態系そのものに向けられることになるため、「生態系中心主義」(ecocentrism)、「生命中心主義」(biocentrism) などと呼ばれる。

- (2) ネスの生い立ちについては次書を参照のこと。David Rothenberg, *Is it painful to think?: conversations with Arne Naess*/the University of Minnesota Press, London, 1993, pp.1-20参照

しかし、自然との幸福なふれあいを得ることができたのとは対照的に、家庭の中では母との葛藤に苦しみ、安らぎをえることはできなかったようだ。彼が言うには、自分は母にとっては「思いがけない」末子であり、生まれた時の母の喜びはなかった。母の大げさな言葉遣いやヒステリックな態度に彼の母に対する嫌悪感はますます増していき、その一方で、母からの日常的な体罰も受けていたという。そうした母親からの愛情の不足を埋めていたのは、彼の奇行を優しく見守る乳母とのふれあいだった。しかし、その乳母からも引き離された時、彼の行く先は、人ではなく慣れ親しんだ山での孤独を楽しむことであった。自然とのふれあい、人間関係における愛情の欠如、この二点はネスの後の環境思想に大きな影響を与える。

その後ネスは、パリ、ウィーン、バークレーの各地で学び、27才の若さでオスロ大学の哲学教授となる。彼の哲学は初期においてはウィーン学派の影響からであろう、科学哲学及び経験的意味論が中心であったが、1968年頃から生態学的哲学(ecological philosophy)へと関心が移る。同年、彼は、オスロ大学で「哲学とエコロジー」と題するレクチャーを行い、さらに、1972年、ブカレストで行われた第三世界の未来についての会議においてシャロー・エコロジー(shallow ecology)とディープ・エコロジー(deep ecology)の区分を明確にした「シャロー・エコロジー運動と長い射程をもつディープ・エコロジー運動」⁽³⁾という報告をした。この報告によって「ディープ・エコロジー」という用語は環境問題に関心がある人々、実践的に取り組んでいる人々を惹きつけ、様々な考え方を持つ人々がディープ・エコロジー運動の下に集結することになった。しかしその一方で、「ディープ・エコロジー」の概念や考え方を巡って誤解や批判が生じたために、ネスは、その誤解や批判に応じる意図をもって、1984年にディープ・エコロジーとは何かをより明確に定義した「ディープ・エコロジー運動－いくつかの哲学的局面－」⁽⁴⁾を発表することになる。

(3) この報告は翌年、雑誌 *Inquiry* (Oslo). 16で以下の表題で発表された。Arne Naess, "The shallow and the deep, long-range ecology movements; a summary." なお、本稿のこの論文からの引用は ed.by George Sessions, *Deep Ecology for the 21st Century*, Boston, 1995 (DE21C と略記) に所収されたものを使用する。

(4) Arne Naess, "The deep ecological movement; some philosophical aspects" 本稿で引用するのは雑誌 *Philosophical Inquiry* 8, nos.1-2 (1986) で発表されたもので、上記の DE21C に所収されたもの。

ネスの環境哲学のエッセンスはこの論文に含まれている。そこには、ディープ・エコロジーの原則とも言うべき八項目のプラット・ホーム (platform), そのプラット・ホームがどこから導出され, どのように環境保護のための実践的規則へと展開されるかを図示した「エプロン・ダイアグラム」(Apron Diagram), そしてプラット・ホームをネス自身の立場から基礎づける, ディープ・エコロジー運動の哲学としての「エコソフィ T」(ecosophy T) が提起されている。そこで, 以下の論述では, この三つのエッセンスを中心に, ネスの環境哲学の解明を試みる。

3 ディープ・エコロジー運動とは何か

(1) シャロー・エコロジーとディープ・エコロジー：最初の提起

「シャロー・エコロジー運動と長い射程をもつディープ・エコロジー運動」において, ネスは, 彼がシャロー・エコロジー運動と呼ぶところの環境思想が, 汚染と資源の枯渇に対する闘いを挑むものであり, その目的は先進諸国の人々の健康と裕福さを守るためのものであると簡単に特徴づけた後, ディープ・エコロジー運動の特徴を以下のように列挙する⁽⁵⁾。

I 有機体は生命圏の網 (biospherical net), あるいは, 本質的諸関係の場 (field of intrinsic relations) における結び目として存在するという「関係的な総体としての場というイメージ」(relational, total-field image) をもつこと。

II 生命圏平等主義 (biospherical egalitarianism) または生態学的平等主義 (ecological egalitarianism)。ただし, 原則として。この但し書きは重要である。というのも, 生態系内部のすべての生物に平等な権利を承認するとなると, 生きるために食べることを含めて他の生物を利用することの一切が許されないという非現実的世界を生じさせるからである。ネスは, 後の著書⁽⁶⁾で「生存のための必要性」(vital needs) という概念を呈示し, それを満たす限りで他の動物の利用, 屠殺, 抑圧は容認されると述べている。つまり, 人間と他の生物との間に対立がある場合には, 「人間の付随的な必要性という次元は他の生物種の生存のための必要性と比

(5) DE21C, pp.151-155

(6) Arne Naess, *Ecology, community and lifestyle*, Cambridge University Press, 1989

較されなければならない」⁽⁷⁾のであって、「他の生物に不必要な痛みを与えてはならない」⁽⁸⁾という規範を考慮しつつ、それが人間の生存のために必要であれば、痛み、殺生も許されるということになる。この点で、ネスのディープ・エコロジーを人間嫌悪の思想 (misanthropy) とする理解は誤解であると言えるだろう。

Ⅲ 多様性と共生の原理 (principles of diversity and symbiosis)。そのスローガンとして「生きて生かせ」 (Live and let live)。これは「おまえかおれか」 (either you or me) の原理と対置され、人間が生きるためには、他の生物種も生かすことが求められるということである。したがって、人間同士の戦争による殺戮、人間の都合による動物の殺戮も原則としてネスは反対する。

次のⅣからⅦは上記の原理を実践に移す際の原則である。

Ⅳ 反階級の姿勢 (anti-class posture)。多様性の原理は搾取する者とされる者との分離、すなわち、階級の維持を容認するものではない。共生の原理及び生命圏平等主義の原理を考慮すれば、多様性は階級なきものでなければならない。また、搾取する者とされる者が存在する状況においては、両者は共に「自己実現の潜在性」 (potentialities of self-realization) にマイナスの影響を与えるもの、言い換えると、狭いエゴに囚われたままの未熟な人間のままとなる (この「自己実現」の概念については後述する)。

Ⅴ 汚染と資源の枯渇に対する闘い。これは一見するとシャロー・エコロジーと変わらないような原則のようだが、生態系及びその問題の全体像を見失って、単に汚染と資源の枯渇に焦点を当てるならば (それはネスにとってはシャロー・エコロジーの立場)、例えば、汚染を軽減するような装置を設置するために生活必需品の価格が上昇することによって、逆に階級差を増大させる、とネスは警告している。この闘いは、ディープ・エコロジーのすべての項目を考慮しなければ、勝利することはできない。

Ⅵ 複雑さではなく、複合性 (complexity, not complication)。生命圏内の有機体は相互作用を及ぼし合っている体系としての複合体 (complexity) であって、断片の複雑な (complicated) 寄せ集めではない。人間の世界においても同様のこと

(7) op. cit. p.171

(8) ibid.

が求められる。つまり、我々の労働も互いに関わることのない断片的なものであってはならず、「工業と農業、知的労働と手仕事、専門的職業と非専門的職業、都市生活と田舎生活、都市で働いて自然で余暇を過ごすのと都市で遊んで自然で働く、等の連結」がなされるような多様な生き方が可能な複合的世界が求められるのである。

しかし、そのような社会を実現するために必要なのは大掛かりなハード・テクノロジー（途方もない新エネルギー源、中央集権化に基づいたより過激な「効率プログラム」、あるいは、人口増加に対する技術的解決策）⁽⁹⁾ではなく、地域の実情にあったソフト・テクノロジー（地域での自給自足、自然との共生を可能にする技術）⁽¹⁰⁾である。そして、それを支援するのは、また支援できるのは国家ではなく、非政府組織（NGO）であるだろう。したがって、さらに次の項目が提起される。

Ⅶ 地域の自律性と脱中央集権化（Local autonomy and decentralization）。ネスは、地域の自足経済の方が、中央集権的システムに依拠する国際市場経済よりエネルギー消費は少ないと考えている。

ネスは、以上の七つの項目について、それらがエコロジー運動の規範であり、その意味でエコロジー運動そのものも哲学的であって、エコロジー（生態学）という科学ではない、ということを強調する。この哲学と科学の違いは何なのだろうか。ネスは次のように述べる。「エコロジーは、科学的諸方法を利用する限定科学である。哲学は、記述的諸原理や規範的諸原理についてのもっとも全般的な討論の場であり、政治哲学はその哲学の下位分野の一つである。私の言うエコソフィとは、生態学的な調和あるいはバランスの哲学を意味する。哲学は一種のソフィア、知恵であり、率直に言って規範的なものであって、我々の宇宙の現状に関して、規範、規則、要請、価値の優先性の公表と共に仮説を含んでいる。知恵とは、政策の知恵であり、規範であって、単なる科学的記述や予測ではない」⁽¹¹⁾。要するに、ネスは、環境問題に対して生態学という科学だけに解決の糸口を見いだそうとするシャロー・エコロジー特有の手法に警報を鳴らしているのである。それをネスは生態学主義

(9) op. cit. pp.96-99

(10) ibid.

(11) DE21C, pp.154-155

(ecologism) と呼び、次のような問題点を指摘する。「生態学主義の名の下に、主として、汚染や資源の枯渇についての一面的な強調によって、また、漠としたグローバルなアプローチに有利になるように低開発国と高度先進開発国との膨大な差異を無視することによって深い^{ディープ}運動からのさまざまな逸脱が擁護されてきたのである」⁽¹²⁾と。

シャロー・エコロジーの立場に立つ限り、問題の解決にならないだけでなく、それはあくまで先進諸国の人間の利益だけを視野に入れた手法なのである。

(2) ディープ・エコロジー運動のプラット・ホーム

さて、上記の七項目のディープ・エコロジーの規範的性格付けは、ディープ・エコロジー運動の多様な支持者を満足させるものではなかった。セッションズによれば、まず、七項目の中には、あまりにも具体的すぎて文化的多様性を考慮に入れないようなものもあるし、また、「内的諸関係」や「生命圏平等主義」のように、すべてのディープ・エコロジー運動支持者が必ずしもそれを支持しているわけではないような原理もあり、さらに「反階級の姿勢」は、とりわけ、エコロジカルな問題ではない、といった問題を抱えていた⁽¹³⁾。そこで、ネスはセッションズと共に、1984年、カリフォルニアのデスバレーでキャンプをしながら、ディープ・エコロジーの諸原則についての15年に及ぶ考察を八項目のプラット・ホームとして総括し、同年セッションズが編集する『エコフィロソフィ』誌のニュースレターとして初めて発表する⁽¹⁴⁾。

プラット・ホームは、ディープ・エコロジー運動において多様な思想的背景をもつ人々の最低限のコンセンサスが得られるいわば、基本原理、キー・コンセプトであり、以下の八項目から構成される。

① 地球上の人間及び人間以外の生命をもつ者が幸福であり繁栄することは、それ自身価値あることである（固有の価値、本質的価値をもっている）。これらの価値は、人間の目的に対して、人間以外の者の世界が有用であるかどうかということとは関係ない。

(12) ibid.

(13) Sessions, "Arne Naess on Deep Ecology: Introduction": in DE21C, p190

(14) DE21C, p.68

② 生命の諸形態がもつ豊かさと多様性はそれらの価値を実現することに貢献し、またそれ自身が価値である。

③ 人間は、生存のための必要を満たすという目的以外は、この豊かさと多様性を削減する権利をもっていない。

④ 人間の生命と諸文化の繁栄は、相当数の人口削減と両立する。人間以外の者の生命の繁栄は相当数の人口削減を必要とする。

⑤ 人間以外の者の世界に対する現在の人間の干渉は度を越しており、状況は急速に悪化しつつある。

⑥ したがって、政策は変更されねばならない。そのような政策は、基本的な経済の構造、技術の構造、イデオロギーの構造に影響を与える。その結果生じる状況は、現在の状況とは根本的に (deeply) 違ったものになるだろう。

⑦ イデオロギーの変化は、主として、生活レベルをますます高めていくことに執着するという変化ではなく、むしろ、生活の質のよさを認識する (固有の価値という状況の中で暮らす) という変化になるだろう。

⑧ 以上の点に賛同する者は、必要な変化を実行に移すよう試みる責務を、直接的、間接的にもっている。

* 『エコロジー、共同体、ライフスタイル』⁽¹⁵⁾では、⑥の「したがって、政策は変更されねばならない」という文がより詳しく「生活の状態をより良きものへもたらす重大な変化は、政策における変化を必要とする」という文に書き換えられている。

上記の項目については、それぞれコメントが付されている。その中で留意する点及び問題点をピックアップしてみよう。

まず、①の「人間以外の生命をもつ者」とは、川、風景、生態系を指し、それゆえ、「生命」(life) という語が有機体だけでなく、きわめて広い意味で使われている。これは、1972年の論文 (「シャロー・エコロジー運動と長い射程をもつディープ・エコロジー運動」) における最初の二つの項目 (I, II) の内容を敷衍したものと考えることができる。つまり、生命圏の網 (biospherical net)、生命圏平等主義 (biospherical egalitarianism)、生態学的平等主義 (ecological egalitarianism)

(15) 註6 参照

を具体的に示したものである。しかし、この点は往々にして個別者の価値を軽視する全体主義という批判を招く。確かに、ネスは、個別者には固有の価値があることは一貫して主張していると述べてはいるが、②の多様性の原則だけでは、種の多様性を維持するためには、個別者が犠牲になる可能性は十分にあるのではないか。この問題は、④の人口削減の主張において先鋭化する。実際、この点には批判が多い。確かに、人間の数は生態系のバランスから考えて明らかに多い。しかし、だからといって強力な産児制限は全体主義的政策として人権抑圧の謗りを招くだろう。

こうした批判を受けて、ネスは、「ディープ・エコロジーの『八項目』再考」という論文⁽¹⁶⁾では、「私は、この八項目がディープ・エコロジー運動のほとんどすべての支持者に躊躇なく受け入れられるべきだと真剣に考えている。したがって、項目の④は、『人間の数がどんどん少なくなることは人間にとっても、人間以外の者にとってもますます良いことだ』という定式の方角へと『和らげられて』もよいと思った」⁽¹⁷⁾と妥協しようとしている。さらに、項目⑦と関連して、「経済的に裕福な国の外にいるもっと多くの人々が、人口削減と生活の全般的な質を維持するか、高めることとは矛盾しないということを理解することが何よりも重要である」⁽¹⁸⁾と述べることによって、人口削減の強圧的印象を回避しようとしている。

次に留意する点は、72年の論文のⅣからⅦに該当する部分である。新しい規定の①から⑤の各項目に同意できる人ならば、それらの原則に基づいた行動を起こすことが要求され、特に⑥において、政策変更への積極的参加が主張される。ではどのように参加すべきなのだろうか。そこで注釈では、「自己決定」「地域共同体」という鍵概念、「グローバルに考え、ローカルに行動せよ」というスローガンが提起される。①から⑤の原則の実現を困難にしているのは、今日の先進工業国が実施している政策が経済のグローバル化に基づいた経済成長策だからである。しかしそれは、第三世界の諸国の経済をますます疲弊させ、人口爆発をくい止めることができず、ますます環境を悪化させる結果を招いている。先進諸国は、そうした地域にハード・

(16) Arne Naess, "The deep ecology "eight points" revisited (1993)" ; in DE21C, pp. 213-221

(17) op. cit. p. 218

(18) ibid.

テクノロジー型の経済援助を行ってはいるが、それは自国の利益に反しないどころか、長期的には利益を見込める援助であり、実際の所、当事国の状況を一向に改善させてはいない。むしろ、真に求められるのは、地域固有の状況にあった、地域共同体を破壊しない援助であり、地域に住む人々の自己決定に基づいた援助である。したがって、私たちはグローバルに行動するのではなく、常に地域のニーズは何かを考慮して行動する必要がある。その一方で、その行動の原則となるのが①から⑤の生命圏全体のグローバルな原則である。「グローバルに考え、ローカルに行動せよ」というスローガンはそのように解釈できるだろう。それゆえ、行動の主体は非政府組織となるべきである。ネスは次のように述べる。「こうした状況を考慮すれば、国際的な非政府組織によるグローバルな行動に対する援助がますます重要になる。こうした組織の多くが『草の根から草の根へ』グローバルに行動することができ、否定的な政府の干渉を回避できる」⁽¹⁹⁾。これはもちろん72年のディープ・エコロジーの規定Ⅶの「地域の自立性と脱中央集権化」に対応する。また、この鍵概念、スローガンは、NGOの活動だけに求められるのではない。⑦においては、先進諸国の人々においても大量消費型の生活スタイル（量重視の生活）から質の高い生活スタイルへの変更の必要性が主張される。

ところで、こうした八項目は「プラット・ホーム」(platform)と呼ばれるが、それを「綱領」と訳さずに原語のままにしているのには理由がある。ネスは、それらが「『原則』とか『プラットホーム』と呼ばれたことは不幸だった。八項目に対するもっと長い名称、例えば、『こうした短い項目は、ディープ・エコロジー運動のほとんどすべての支持者によって受け入れられるように思えるまったく一般的で抽象的なひとそろいの主張』といった名称が不可欠である」⁽²⁰⁾と述べている。この規定の中の「のように思える」(seem)という言葉が示すように、八項目は決して強い拘束力をもつものではないのだ。さらに、「八項目はもちろんディープ・エコロジー運動の定義として機能することを意図されたものではない。つまり、その用語の使い方の規則を付与するような定義として、また『ディープ・エコロジー運動』が実際どのように使われているかについての単純な記述として、ディープ・エコロ

(19) DE21C, p. 70

(20) DE21C, p.214

ジー運動の本質の表現として機能することを意図されたものではない」⁽²¹⁾。もはやこれは政治的な意図を持つ「綱領」とは呼べないだろう。ディープ・エコロジーは哲学ではなく運動であって、様々な思想をもつ「草の根」市民がその上でそれぞれ自由な運動・活動を行う共通の「土台、ステージ」（プラット・ホーム）なのである。したがって、platform はそのままプラットホームと訳しておく。

4 エプロン・ダイアグラム

上述したように、プラット・ホームに同意する人々は様々な思想をもっている。しかし、それらの思想とプラット・ホームはどのような関係にあるのだろうか。また、プラット・ホームに同意したとしてそれがどのように実践へと展開されるのだろうか。それらの関係を図示したのが、「エプロン・ダイアグラム」である⁽²²⁾。（図参照）

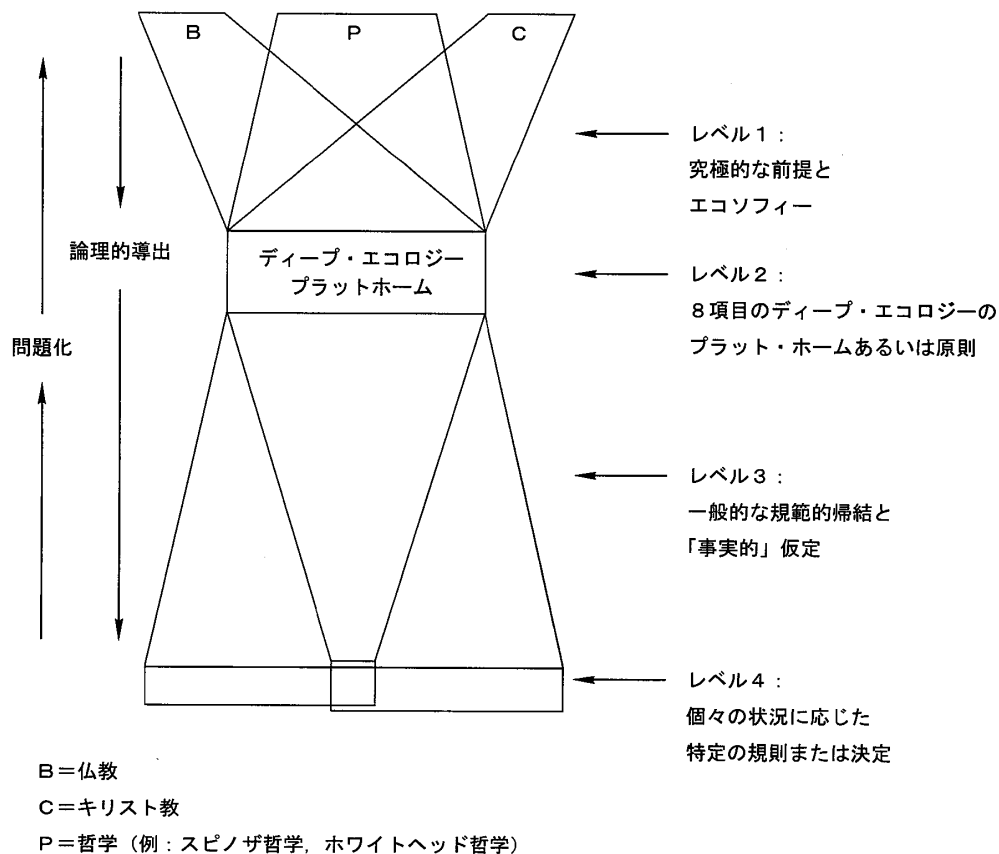


図 エプロン・ダイアグラム

(21) ibid.

(22) DE21C, p.77

【問題化 (questioning)】

シャロー・エコロジーとディープ・エコロジーの違い、つまり「ディープ」とは何かというと、「それはなぜか（その主張の根拠、前提となっているものは何か）」という問いを徹底的に根気強く押し進める（問題化する）過激さのことである。環境問題に対処するために様々な規則が提起されるであろうが、それが環境問題を真に解決に向かわせるのかどうかを皮相的な浅い答えに留まらずに問いを深めてゆくのである。そして、この問いの先には、それ自身もはや理由のつけようのない自明な価値、端的に「～せよ」という命令でしか言いあらわせない規範に行き着くことになるはずだが、それはある人にとっては哲学的なものであり、ある人にとっては宗教的なものであるだろう。

【レベル1：究極的な前提とエコソフィ (ultimate premises and ecosophies)】

それがレベル1の「究極的な前提とエコソフィ」である。その際、究極的な前提とは仏教に根ざした価値 (B) でもキリスト教に根ざした価値 (C) でも、その他のどんな宗教であってもよいし、宗教ではなく哲学 (P) であってもよい。もちろん、その哲学も各自固有の哲学であってよい。ネスはレベル1にあたる自分の哲学を「エコソフィー T」と呼ぶ。

【レベル2：八項目のディープエコロジーのプラットフォーム、あるいは、原則 (the 8-point deep ecology platform or principles)】

レベル1においては、さまざまな価値観が一つになることはないだろうし、一つになる必要もない。しかし、どのような宗教、哲学であれ、それから論理的に導出される規範のいくつかは互いに重なり合うはずである。それが八項目のプラットフォームなのであり、ここが、どのような立場からも環境問題の討論が可能となる「土台、ステージ」となるのである。

【レベル3：一般的な規範的帰結と「事実に基づく」仮定 (general normative consequences and “factual” hypotheses)】

【レベル4：個々の状況に応じた特定の規則または決定 (particular rules or decisions adapted to particular situations)】

レベル2のプラットフォームの原則が承認されれば、レベル3においてそれらから導出される一般的な規範に事実としての諸仮定（地球温暖化、オゾン層の破壊、動

物種の絶滅など)がプラスされることによって、レベル4において論理的にさらに個々の状況(地域固有の文化、風土など)に応じた実践的な規則が導出される。

【論理的導出 (logical derivation)】

レベル1のもっとも強力な規範からレベル4のゆるい規範までは論理的に導出されるのであって、これによってディープ・エコロジー運動は「論証されている」ことになる。この図はスピノザの『エチカ』の幾何学的構成が範型となっているわけだが、ネスは、『エチカ』がもつ合理的な倫理体系と同様に、ディープ・エコロジーもまた合理的な体系を有していることを主張したかったと考えられる。シャロー・エコロジーが深いレベルでの基礎付けのないレベル4かせいぜいレベル3までの皮相的で断片的(したがって、近視眼的かつ人間中心主義的)な解決策しかもたないのに対して、ディープ・エコロジーは、レベル1からレベル4までを総体的に見る(total view)規範体系であるがゆえに根本的(したがって長い射程をもつ生態系中心主義的)な政策を生み出すことができるというわけである。

さて、このエプロン・ダイアグラム内のレベル1において、絶対的な合意が要求されているわけではないことをもう一度確認しておこう。おのおのが多様な世界観、価値観をもった思想から出発してよいのであって、それらが最低限合意できる比較的ゆるい項目、すなわちプラット・ホームを確認できればよい。ネスはそれができると考えている。では、プラット・ホームに論理的に到達するような思想はどのようなものがあるか。

人間の歴史においてはずっと宗教的教義、および、その思想が一人一人の人生の規範や社会的規範を与えてきた。世俗化した現代社会においてもほとんどの人間が多かれ少なかれその影響下にあると言ってよい。したがって、プラット・ホームへ到達する思想としてまず、諸宗教を挙げなければならないが、諸宗教は環境問題についてそれを解決する思想をもっているだろうか。もちろん今日的意味での環境主義的理念を教義としてもつような宗教はないだろう。しかし、仏教、ヒンズー教、道教などの東洋の宗教思想やアニミズムにおいては、人間以外の生物に固有の価値を認め、人間だけに特権的地位を付与しないいわば「生命圏平等主義」の立場を取るものが多い。したがって、このような宗教を背景にしてディープ・エコロジー運動に関与することは十分可能である。キリスト教については、「神の似姿」として

の人間の自然界における中心的地位、支配的役割という特徴が顕著な宗教であり、その人間中心主義的思想が環境危機をもたらしたとするリン・ホワイトによる批判⁽²³⁾は、環境思想史においては、画期的な事件だった。しかし、ホワイトの批判以降、環境思想的視点から聖書の再解釈が行われ、キリスト教文化を擁護する立場から環境思想を構築しようとする動きも出てきた。例えばパスモア⁽²⁴⁾は、聖書に記述される「支配」とは「管理」のことであり、自然環境を管理することと破壊することは両立しないとしてキリスト教を正統派の立場から擁護しようとする。

しかし、宗教だけがレベル1に相当する究極的な規範を付与するものではない。ネスはスピノザ主義、ホワイトヘッド主義を例としてあげているが、宗教と密接に関与しつつも「問題化」(questioning)を深く押し進めることで独自の究極的規範へと到達する思想、換言すれば「哲学」もまたその資格を有するものである。ネスも自らの環境哲学、エコソフィ T を提起する。

5 エコソフィ

「エコソフィは伝統的な意味における宗教ではない。それらはエコロジーという科学に部分的に触発された、総体的見方という意味における一般哲学である」⁽²⁵⁾。総体的見方は多様であり、ネスは自らの総体的見方を「エコソフィ T」と呼ぶ⁽²⁶⁾。つまり、エコソフィ T とはネスの個人的な哲学である。

(1) 自己実現

「自己実現」論は、ネスの環境哲学（エコソフィ T）の最も重要な部分であるので、長くなるが彼の説明を引用する。

「エコソフィ T は、ただ一つの究極の規範『自己実現！』をもっている。私は、この表現をいかなる個人主義的な狭い意味でも使ってはいない。私は、大きな包括的自己 (Self) と、ある東洋思想の $\dot{\text{ア}}\dot{\text{ト}}\dot{\text{マ}}\dot{\text{ン}}$ (atman) の伝統において思い描かれるものとしての狭い利己主義的自己 (self) との区別に基づいた拡張された意味をそれに付与したい。この大きな包括的自己 (大文字の S) は、地球上（そして、

(23) White, Lynn, Jr. "The Historical Roots of Our Ecological Crisis" in *Machina Ex Deo* (Cambridge, MIT Press, 1968) (邦訳, リン・ホワイト「現在の生態学的危機の歴史的根源」, 『機械と神—生態学的危機の歴史的根源』みすず書房, 1972年に所収).

どこかの惑星上?) のすべての生命形態をその個別的自己 (jivas) とともに包み込んでいる。もしこの究極的規範を数語で表現できるとしたならば、『(長い射程をもつ普遍的な) 自己実現を最大化せよ!』と私は言うだろう。この究極的規範をもっと日常的な言葉で表現するならば、『生きて生かせよ!』(地球上の生命形態と自然過程のすべてに言及しつつ) となるだろう。もし、これらの用語が必ずや誤解されるだろう事を懸念して、その使用を断念しなければならないとするならば、『普遍的共生』なる語を使うだろう。…個別的ではなく、体系的に見ると、自己実現の最大化はすべての生命の表出の最大化を含む。したがって、次に私は第二の規範、『(長い射程をもつ普遍的な) 多様性を最大化せよ!』を導出する。どんな人もその自己実現のレベルが上がれば上がる程、そのさらなる増大は、ますます他者の自己実現に依存するようになるのは必然である。増大した自己同一性は他者との同一化を増大させる。『利他主義』はこの同一化の自然な帰結である。…上記を統括すると、我々は『あらゆる存在のための自己実現!』という規範を導出できる。『多様性を最大化せよ!』という規範と、最大の多様性は共生の最大を含むという仮定から我々は『共生を最大化せよ!』という規範を導出できる。…このように全く単純な道筋でディープ・エコロジーのプラット・ホームの八項目が導出されるのである」⁽²⁷⁾。

ネスにとっての究極の規範である「自己実現!」(Self-realization!) あるいは「自己実現を最大化せよ!」(Maximize self-realization!) を出発点として、「生きて生かせよ!」(Live and let live!) 「普遍的共生」(universal symbiosis) 「多様性を最大化せよ!」(Maximize diversity!) 「利他主義」(altruism) 「あらゆる存在のための自己実現!」(Self-realization for every being!) 「共生を最大化せよ!」(Maximize symbiosis!) といったスローガンとしての規範⁽²⁸⁾ が次々に論理的に導出される。

自己実現とは何か。それは自分が他者とは無関係に存在し、自己の利益のために

(24) Passmore, John, *Man's Responsibility for Nature: Ecological Problems and Western Traditions*. New York, 1974. (邦訳, ジョン・パスモア『自然に対する人間の責任』岩波書店, 1979年)

(25) DE21C, p. 79

(26) T というのは、彼の山小屋がある Tvergastein という山の頭文字を取ったものである。

(27) DE21C, p.81

他者を利用しようとする利己主義的 (egoistic) な小さな狭い枠の中に閉じこもったままの自己 (self) から、その枠を外へ外へと拡大して、すべては依存し合っている (everything hangs together) 存在であり、自分は他者との関係の中で生かされている存在であることに気づくことであり、他者と一体 (oneness) となり、大いなる自己 (Self) を実現することなのである。この場合他者とは、他人のことだけをさすのではない。それなら自己実現とは単に自我から社会的自己への成長を意味しているに過ぎない。ネスにとっては、それでは全く不十分であり、そのような立場での環境保護運動はシャロー・エコロジー運動かそれ以下ということになるだろう。自己実現はさらにより「深く」より「大きく」拡大されねばならない。つまり、他者とは、他の生物であり、生物をとりまく自然環境であり、地球という惑星である。「生きて生かせよ！」とは「自らが生きるため (自己実現するため) には、他者を犠牲にしてはならない、他者の自己実現を妨げてはならない、自己の自己実現は他者の自己実現に依存しているのだから」ということを意味している。したがって、自己実現のためには「利他主義」、他者との共生が不可欠であり、それを最大化することが規範となる。そして、そのようにして実現すべき自己とは「エコロジカルな自己」 (ecological self) でもある。

しかし、そのような規範を義務として抱えるのはつらいことなのではないだろうか。ネスはむしろ、「生命の意味、生きることに於いて我々が経験する喜びは、増大する自己実現、つまり我々の誰もがもっている潜在力の発揮によって増大させられる」⁽²⁹⁾ とし、それが喜び (Joy) をともなうことを指摘する。このことは「生きて生かせよ！」のスローガンに現れている。まず、「生きよ」と命じられる。それは、自分の潜在能力を思う存分発揮してよい、自己を犠牲にすることはない、しかし、それが発揮できるのは、自己の欲望のままに生き、他者の潜在能力の発揮と衝

(29) これらのスローガンに見られるしつこいほどの感嘆符 (!) は、戯れに付けられているのではない。一般に、感嘆符の付与による感情的な強調は、環境保護運動の議論を台無しにし、それを過激な行動に走らせてしまうのではないかという危惧を抱かせるものだが、ネスはむしろ、究極的な価値・規範を考える時、それは強い感情で動機づけられているはずだから、それははっきり表明 (speakout) すべきだ、中途半端な態度はやめて、自分にとって明証な価値・規範を素直に表明しよう、と主張する。そのような態度こそディープ・エコロジー運動の出発点なのだ、とネスは考えている。したがって、この感嘆符はスローガンの一部なのである。

突することによってではなく、むしろ「他者を生かす」つまり、他者の潜在能力の発揮を手助けすることによってなのである。ネスは次のように述べる。

「もし、我々が同一化しようとする他者の自己実現が妨げられるのならば、我々の自己実現も妨げられる。我々の自分に対する愛は、「生きて生かせよ！」という定式に従って他者の自己実現を手助けすることによって、この妨げと闘うだろう。利他主義（他者への義務的、道徳的配慮）によって獲得されるすべてのものは、我々自身の自己の拡大化、深化する過程によってのほうがますます多くが獲得されうる。そのとき、我々はカントにならって言えば、美しく行為するのであり、道徳的にも反道徳的にも行為しているのではない」⁽³⁰⁾。

ここに、ネスの環境思想が倫理学であって倫理学であらうとしない難解さがある。おそらく、環境問題を解決するために状況に応じた倫理的規範を構築する段階では、ネスに言わせれば、まだシャロー・エコロジーの段階なのであって、結局、それは人間の利己的欲求との葛藤の中できわめて不安定なものに留まらざるを得ないのであろう。しかし、自己が利己的自我を超えてエコロジカルな自己へと深化することによって、そこにはもはや道徳的葛藤はあり得ない、むしろ静かなる「喜び」の境地（ネスはその一例として仏陀が到達した「ニルヴァーナ」を挙げている⁽³¹⁾）であって、私のすべての行為は結果として環境倫理的に正しい行為となる。

しかし、こうしたネスのエコソフィに対しては、例えば、キャリコットによって神秘主義的だという批判がなされる。確かに、エコロジカルな自己なるものが自然環境、さらに地球そのものとの一体化という意味であるならば、環境問題の現実的解決からほど遠くなっているように思える。しかし、これはネスの個人的環境哲学であって、これが真理だとして他者に強要しているわけではない。ネスが求めるのはプラット・ホームにおける合意だけである。ただし、その合意に到達すれば、さらに問題化（questioning）を深化することによって、だれもが環境問題を根本的に解決するためには、エコロジカルな自己へ向けて我々の心のあり方を根本的に変革せずにはいられないとネスは考えているのではないだろうか。そんなことは無理

(29) Arne Naess, "Self-realization; an ecological approach to being in the world" in DE21C, p.226

(30) ibid.

(31) op. cit. p.255

だという人々が大半だろう。そんな人をネスの諸々の論文は絶えず励まそうとして
いる。それは不可能ではない。その潜在力は誰にでもあると。それが感嘆符の意味
するところなのである。